

萱

2020·1

風萱集

亀田虎童子

蠟螂を食ふ蠟螂と眼の合ひぬ
たてがみも蹄も無くて冴ゆるかな
手に負へぬことに手を引く日向ぼこ
「今晚は」と言ひたくなりし窓の月
年年に梟の樹の遠ざかる

木村 嘉男

疑似餌巻く破魔矢の白羽ほぐしては
幹打てば晩鐘うなりつつ到る
熟柿落ちわが生よこのさきことあらじ
冬に入る金魚を鉤に吊しをき
長き夜や柴胡サイカリユウコツボレイトウ加竜骨牡蛎湯

松下 道臣

見馴れたる景のとほのく秋がすみ
肖すじの立つほど怒り秋暑し
仏壇のメロンの況を川してみし
夕かなかな聴きてからだの力抜く
爽やかにうなじの見ゆる人が好き

小島 良子

芒野を行く化野を行くやうに
返り花忌日につづき忌日来て
暮早し坂の途中に並ぶ家
小六月略図の橋を渡りけり
稲敏の蓮根の穴数へもし

出牛 進

ごつた返す物置ありて、鱗雲
秋没日抜きぬる草の名を知らず
秋の夜の文字美しき古今集
冬立つや草加松原菰を巻く
菰巻は腹巻に似て今朝の冬

萱集

進選

林泉の上枝に響む鹿威し
後の月ひと駅我を歩ましむ
ふるさとや粃殻焚きの風呂ぬくし
円かな目海を見て来し秋刀魚かな
空缶の郵便受けや木枯し来

東京 武田 未有

お多福にそれぞれの笑み酉の市
米まきて雀呼びよす一茶の忌
早々と雨戸引く音そぞろ寒
新聞に載らば老女や蜜柑むく
気負ひなき余生勤労感謝の日

千葉 中山 恵子

新走今年に浸る甲夜かな
自転車を寝て漕ぐ老爺冬帽子
入母屋の社の静寂神の旅
いのこずち別嬪さんのスラックス
虫時雨寄せる十色を聞きなせり

東京 野村 宏

大君の提灯に沸く昂かな
漆の実繩文人の指紋跡
ちからづく美男葛を引きよせぬ
流木に絨毯かかる台風禍
列島は西高東低石路の花

埼玉 鈴木 愛子

尉鷄しろくる黄色風の中
栗飯を炊きそびれたり秋出水
糴) 田や忘れられたる鳥脅し
烏瓜どこまでも蔓引き出され
草の花出会ひし人に教へらる

埼玉 後藤美智子

忘却の無限級数秋終る
金木屋こぼれて黄泉の土と為れ
十月や二円切手を貼り忘る
秋宵や三代続くサザエさん
紅葉して水は青藍箒川

東京 ふなかわのりひと

あかがねの鈴ふりならず小春かな
揺揺と結びめを解す十夜かな
まんまるき雨降が山の次郎柿
黙深し更けて藁打つその影も
川端の提灯ともる桃青忌

東京 根来 隆元